

バカとテストとフラグ
魔ース～フラグ魔達の
奮闘記～

近衛龍一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、ラノベ最強格のフラグ魔が3人集まったら……？

バカテス代表吉井明久、とある代表上条当麻、恋姫代表北郷一刀。

この3人が文月学園でFMクラス（通称：フラグ魔クラス）として学園に波乱を起こす!?

「アキはFクラスに来るの!」「ダメなのだ! お兄ちゃんはAクラスなのだ!」「アンタはAクラスに来ればいいの!」「そうです! 当麻さんはAクラスに来るべきです!」

「ご主人様もAクラスに!」「そうだそうだー! ご主人様はAクラスだー!!」

明・当・一 「くそっ……! 皆俺（僕）を抹殺するつもりだな……!?!」

「「「なんでそうなるの!」「」」」

予想不可のフラグ魔達の豪快ハチャメチャラブ(?) コメディー!

目次

プロローグ	1
FMクラスの実態	11
明久達の予測	17
敵との取引	23
最後の秘策	30

プロローグ

桜咲き乱れる春。

僕がここを通るのももう二回目だ。

「おつす明久」

「おはよう明久」

「当麻に一刀。おはよ」

登校中、出会ったのは僕の親友である上条当麻と北郷一刀。

2人とも物凄いフラグ魔で女難が酷くて苦労してる、なんて羨ましい状況の中、自分のハーレム状態を理解していないバカなやつらだ。

「いや、それはお前だろ」

なんで僕がつっこまれたのかはさて置いて……。

この2人、フラグを立てるだけ立てて放置。

2人に恋心を抱いているというのにどれだけアピールしても気づいてもらえないという生殺しの状態にある女子生徒が多発している。

まったく、質の悪い男だ。

「それ、お前には言われたくない。てか、俺じゃなくて明久と当麻がフラグ魔なんだろう？」

「ないな。不幸な俺がそんな美味しい状況にいるわけないだろう？ 一刀と明久がフラグ魔なんじゃないか」

「ははっ。2人とも冗談でしょ？ 自慢じゃないけど、僕は生まれてこの方モテるどころか手を繋ぐレベルの女性経験すらないからね？」

沢山の女の子から好かれてる当麻達とは違うんだよ。

……………悲しい意味の方だけど。

だいたい、あんなにフラグ立てるって何？

主人公補正でもかかっているの？

しかも気がつかないなんてワザだと思えないよ。

『おいおい明久。お前が言うなよ』

むっ、僕の中の悪魔か。

一話目だというのに登場が早いな。

『お前のメタ発言は置いといて、お前も相当なフラグを立ててるぞ？』

そんなわけないじゃないか。

一体何を根拠に…………

『えく？ だって島田だろ？ 姫路だろ？ 恋だろ？ 鈴々もだし、朱里もだし……』

な、なんだと……？

僕にはそんなにフラグが立っているというのか!?

これは僕にも春が……!

『それに久保もだ』

………来ていないようだね☆キリッ!

『………だから来てるんだって』

黙れ悪魔め!

前半はよかったのに最後は男じゃないか!

僕は断固として信じないぞ!

やっぱり僕はフラグなんて立ててないっ!

『ダメだよ明久。現実逃避なんてしちゃ。それに久保に目を瞑れば素晴らしいメンツじゃん!』

相変わらず遅い登場だな、僕の中の天使。

でもまあ……今回はマトモな意見じゃないか。

もし仮に悪魔の言うことが本当なら僕の人生は素晴らしいものになるし……いや、でも待てよ……?!

こんな僕を好きになる女の子なんているか……？

僕に異性としての魅力がないように思えるんだけど……？

『まあそう自分を卑下するなよ。お前はブサイク、バカ、下心の塊という点に目を瞑れば財力、甲斐性、能力、才能が皆無というだけじゃないか』

何だと悪魔!?

こと言うにこの僕にはセパタクローしか残ってないというのか!?

『何でセパタクロー!? その返答は流石の俺も予想出来なかったぞ!』

『安心して明久。まだ明久には残ってるものがある!』

何だって!?

それは何なんだよ天使!

『女装が似合うってことだよ♪』

……ふんっ! ↑僕が天使をぶん投げる

まったく、僕に女装が似合うわけじゃないじゃないか。

冗談言うなんて本当に僕の中の天使なのか……？

『いや、冗談じゃないと思うが』

……お前もぶん投げてやろうか悪魔……？

「おい明久。一人で何を考えてるんだ……？ 俺たちを放置して一人で世界に浸かるな」

『さらばだ明久っ☆キラッ』

くっ……………！

当麻が話しかけてきた内に逃げるとは……………！

中々やるじゃないか……………。

「ごめんごめん。ちよつと自分の心と格闘しててさ」

「何を言ってるんだ…？ まあいい。それより、振り分け試験はどうだった？ 手応え

あるか？」

「大丈夫だよ。今回はストライカーシグマファイブのおかげで5問に1問は当たってると思うから」

「テストの選択問題って4問だったよな……………？」

な、何？

何で当麻と一刀は僕を『やっぱダメだこいつ……………』みたいな目で見てるの……………？

僕としては良くてB、Cクラス。悪くてもDクラスには行けてるつもりなんだけど

……………

「明久は放っておくとして、当麻はどうなんだ？」

「ダメだ。たぶん、Fクラスだな」

「そうか。俺はBクラスにはいけると思うぞ」

む、そうなのか。

じゃあもしかすると一刀と同じクラスになれるかもね。

そんな淡い期待を胸に、僕らは桜道を歩いていった。

☆☆☆☆

「おはよう吉井、上条、北郷」

校門前。

僕らの前に立ちはだかるのは、黒い肌の生物学上人間であろう男が立っていた。

「……吉井、今失礼なことを考えなかったか……？」

「いえ、とんでもない」

もとい、西村先生が立っていた。

「まあいい。それにしてもよく遅刻してこなかったな」

「ま、流石に始業式くらいの日は。ところで、何でこんなところに立ってるんですか？」

「それはお前たちに振り分け試験の結果を渡すためだ」

「んなことしなくても掲示板かどっかに貼り出せばいいんじゃないですか？ 一々渡すの面倒でしょ？」

「そういうわけにもいかんのが。ここは世間にも注目されている学校だからな。少し趣向を変えてというのが学園長の考えだ」

「そうなんですか、大変でしょうね」

「で、振り分け試験の結果は……？」

楽しみだ。

早く結果が知りたい。

「あー………それなんだがな………」

鉄人は、何だかバツが悪そうに隣の段ボール箱から3つの封筒を取り出す。

どうしたんだろ？

「これがお前らの振り分け試験の結果だ」

取り出した封筒を、一人に一封ずつ手渡ししていく。

表面には各自の名前が書いてあって、上は糊付けと、割りと本格的だ。

「結論から言うとお前らは同じクラスだ」

「なん……だと……!? ということは俺は明久と同じ……!? Fクラス確定じゃないか……!」

鉄人の言葉に頭を抱えてショックを受ける一刃。

失礼な。僕と一緒にDクラスは堅いのに。

「な、名前でも書き忘れたんでしようか……?」

「いや、北郷の点数はBクラス並だったぞ」

「え……? つてことは……」

「だがBクラスではない」

はい……?

この人は何を言ってるんだろうか……?

一刃の点数はBクラス並なのにBクラスじゃないだつて……?

まったくこの人は……

「おい吉井。今お前俺をバカだと思っただろ」

「とんでもない」

……なんて鋭い人なんだ。

まあでも、とりあえず結果はこの封筒の中をみれば分かるはずだし早く開けよう。

僕は封筒の上の部分破り、中に入っている一枚の紙切れを出す。

そして当麻や一刀と同時に紙を開き……

「「……………え？」」

疑問を抱いた。

「まあ……………そういうことだ。教室は本校舎のAクラスとBクラスの間にある。頑張れよ」

そして、そう鉄人に告げられた。

「あ、あの……………このクラス名の意味は…？」

「知らん」

まだ何が起こったのは分からないまま、僕らは校舎の中に入っていった。

吉井明久 F Mクラス

上条当麻 F Mクラス

北郷一刀 F Mクラス

「……まさかクラス名が『フラグ魔クラス』なんて言えるわけないだろうが……」

FMクラスの実態

「……………ここ、Aクラスじゃないよね…………？」

一度教室を出てぶら下がっているクラスプレートに目を通すけど、先ほどと変わらず、FMクラスとなっている。

ここに来る前に通ったAクラスの教室の設備は、学校の物かと思えるほど凄かったんだけど、何故かここも設備が一緒だった。

唯一違うところといえば、中にある席が3つというのと、教室の広さなのだが。

それでも通常のクラス分の広さがあって、とてもじゃないけど席が3つというのは合っていないと思う。

「……………？」

「どうするって……………入れよ明久…」

うん……………。

確かにお菓子とかドリンクバーも設置してあるから栄養を摂取できる分には入りた
いんだけど……………なんか僕には合っていない気が……………。

「躊躇う気持ちも分からなくもないが、とりあえず教室に入れ、吉井、上条、北郷」

「「鉄人!」」

「鉄人と呼ぶな!」

し、しまった…。

この教室に気を取られてたから、気づけばナチュラルに鉄人と呼んでしまった……。
というわけで鉄人により教室前でたむろしてた僕らは教室の中へ。

慣れないフワフワのリクライニングシートに腰を降ろし、設置してある個別クーラー
や個人冷蔵庫を眺める。

当然、色々弄くる勇氣なんてない。

「え、お前らの所属することになったFMクラスの担任である西村宗一だ。一年間よろしく」

「「はい……………つてええっ!」」

鉄人が担任だと!?

な、なんて不幸なんだ……!

これもそれも不幸を引き起こすイメージブレーカーの持ち主の当麻のせいに決ま
てる!

当麻と一緒にんだからこれくらいのこと予測しておくべきだった……!

「その悲鳴の意味を教えてもらいたいが……時間が無いからいとしよう。自己紹介は

今更だからいいな。とりあえず、このクラスのことについて話したいと思う」
待ってました。

僕たちが最も気になっていること。

なぜAとFのどのクラスにも所属しないで僕ら3人だけこのクラスなのか……。

「このクラスは今年から導入されることになったクラスだ。超少数精鋭、そしてお前らには苦勞を伴ってもらうため、成績に関係なくAクラスと同等の設備が与えられている」

待って!?

成績に関係なくAクラスと同等の設備が与えられるほどの苦勞って何!?

尋常じゃなく気になるんですけど!?

「ここからが重要なんだが、このクラスも他のクラスと同様に試験召喚戦争は行われる。ただし、このクラスのみ、撃破条件は3人共倒す、ということになるがな」

なんだと……??

僕らは試験召喚戦争に通常通り参加するのにたったの3人だけ……??

確かどのクラスも50人だって聞いてるんだけど……。

いくらウチのクラスへの勝利条件が全員とはいっても厳しい部分がある。

でも待てよ?!

Aクラスと同等の設備はここには3つしかないわけだし、狙われないんじゃないのか……？

「と、もう一つ。お前らは負けても設備交換は行われない」

設備交換はなし……？

じゃあ尚更狙われないじゃないか。

「だが、お前らが負けた場合は勝ったクラスが指名した一名がそのクラスに所属することになる」

「ってことは、ここに宣戦布告してくるってことは俺らの内の誰かが必要だと感じたってことですよね？」

「そういうことになるな」

まあ確かにクラスメイトを増やすってことは次回からの戦争に大きく役立つわけだし……。

「それと、このクラスに宣戦布告する為には2クラスに勝った場合のみ、仕掛けることが許される。当然、ここが拒否することはできない」

なんなんだその特殊ルールは……？

それだと、2クラス下すだけの力を持っているのにわざわざ人材を求めてここを責めるってこと……？

それって必要なくない……？

「あの……僕が言うのも何なんですけど、僕らってそこまでしてクラスに引き入れる価値はないと思いますけど……？」

さっきの紙に書いてあったんだけど、このクラスに所属しなかったら僕はFクラスだったらしい。

大した戦力にはならないし、秀でた能力もない。

当麻もFクラス並の点数だったわけで、一刀はBクラス並の点数だったけどそこまでリスクを負って手に入れるほどでもない。

「ま、お前らはそう思ってる……」

ガチャ

「西村先生。AクラスがEクラスに。FクラスがDクラスに試験召喚戦争を挑みました。至急きてください」

ちようど鉄人の話が終わったタイミングで大島先生の登場。

もう試召戦争始まったの……？

というか、Aクラスが宣戦布告……？

「いいからお前ら。そういうことだから今からは自習だ。静かに……とは言っても無理だろうから、騒ぎ過ぎないようにしておけ」

鉄人はそう僕らに伝えると、大島先生と共に教室を出ていった。

明久達の予測

「なあ明久……。このシステムについてどう思う……う？」

鉄人が出ていった後、一刀がトイレに行き、僕と当麻は設置してあるドリンクバーで飲み物を入れながらFMクラスのことについて話していた。

え？ ドリンクバーを使うのかって？

当然じゃないか！ どうあがいてもこのクラスなのは確定なわけだし、ここの設備を使い続けられるまでは使い尽くす！

「どうって言われても……不思議だとは言いやうがないよ」

何故僕らがFMクラスに選ばれたのか。

Aクラスの久保君みたいに、沢山の女子から人気がある人がこのクラスだったら争奪戦になるから効果はあると思うんだけど……僕らじゃねえ……？

「だよな……。俺たちを獲得するために3クラスも落とすなんてリスクを負う物好きなクラスはないだろうしな……」

「でも現にAクラスとFクラスがすぐに動いたわけだし……このクラスに、落とすだけの価値があるのは確かだよ」

「そうなんだよなあ……」

そんなことを言っていると、一刀が帰ってきた。

だけど、その顔は何かを悟ったような、少し哀愁を含んだ様子だ。

「明久、当麻……。俺はこのクラスの秘密を知ってしまった……」

「え!?! 何が分かったの!?!」

「いいか明久。俺たちを獲得するためにAクラスが戦争を始めたのは俺たちを奴隷にでもして俺らへの恨み辛みを晴らすためだ」

「……………あはは。何をいうかと思えば。Aクラスの人は皆良識のある人ばかりだよ? そんな僕らを奴隷にするなんて……」

「そう思うならこれを見てみる」

前にある液晶スクリーンの電源を入れる。

映し出されたのは様々な召喚獣の姿。

各召喚獣にAやEのマークが付いていることから、どうやらAクラス対Eクラスの試合が映し出されているようだ。

『……………絶対に明久をAクラスにする』

『そうなのだ! 絶対に譲らないのだ!』

『皆! 倒されたらただじゃおかないからな!』

『必ずFMクラスを倒す!』

中でも一際目立っているのが先頭に立って戦っている恋、鈴々、愛紗、凧の姿。皆凄く頑張っているんだけど……殺気が半端じゃない……。

というか凧、もうFMクラスを倒すとか言ってるし……。

「凄いだろう? んでもって極めつけがこれだ」

画面が切り替わり、映し出されたのは10人ほどのEクラスの生徒を前に立ちほだかる御坂さん。

『絶対にあいつをここにしないといけないの……! 超電磁砲』

レールガン

っ!!』

殺気立つ御坂さんの召喚獣から放たれる電磁砲。

それは一瞬にしてEクラスの召喚獣を一気に飲み込み、召喚獣を消し飛ばした。と。

ちようどその場面で一刀がスクリーンの電源を切った。

「どうだ……? 今回の殺気、尋常じゃなかっただろ……?」

「た、確かに……」

あれは人を殺る時の目だった。

あまり印象に残らなかったけど、心なしか一緒に戦っていたAクラスの男子ですら恐怖に怯えていたような……。

「だけど僕たちが怒まれる理由って……？」

そう、当麻に問いかけたのだが……

「(ガクブルガクブル)……やばいですよ……上条さんこの間御坂を怒らせちゃいましたよ……！」

……どうやらヤツには心当たりがあるようだ。

当麻は基本相当仲のいい人の前以外だと一人称が上条さんにならないんだけど……よほどヤバイんだろうね。

え？ 僕と当麻はそんなに仲がいいのかって？

当然じゃないか！

僕と当麻は毎日食費がピンチな者同士なんだから！

「え〜つと……当麻？ 因みに聞くけどこの間はなんて言って怒らせたの……？」

「いや、分からないんだけど、上条さん、御坂に『え？ タイプ？ 特にないけど……胸は大きい方がいいかも』って言ったらいきなりビリビリが飛んできて……」

そりゃ怒るわ。

だって御坂さん、当麻のこと好きなんだもん。

なの……その……御坂さんはそこまで大きくないといいますが……とにかくさっき言った当麻の言葉には若干味そぐわれない部分があつて……

ま、そういうことで……

「当麻、もう諦めよう」

「酷っ!!? こんな不幸な上条さんを見捨てるって言うのですか!?!」

だつて無理じゃん。

あんな電磁砲放つ人に勝つなんて。

元はといえば御坂さんを怒らせた当麻が悪いし。

「上条さんを見捨てるなんてそんなこと言つていいんですか!?! 大体明久は鈴々と恋のお弁当つまみ食いしたのばれてますし、一刀だつてエロ本持つてること愛紗と桃香と風が怒つてましたよ!」

「なんだつて……!?! 食べ物への恨みは恐ろしいつていうのにあの二人のはもつと恐ろしい……!?! 完璧に隠せたと思つてたのに……!?!」

「くそつ……!?! 破廉恥なこと大つ嫌いな愛紗と風とそのことがばれただと……!?! 桃香も何気に俺がエロ本持つてること怒るし……!?!」

なんてことだ……!?!

一気に状況が変わつた……!?!

「どうですか？ 上条さんを見捨てませんか？」

「当然！ 同じ危険な身の者同士、頑張って助け合っていこう！ ☆キリッ」

え？ 都合がいい？

知るかそんなもの。

改めて僕らの結束が深く固まった瞬間であった。

敵との取引

あれから二日後。

昨日はA、Fクラスが順調に勝ったという報告を受けて、どちらが先にくるのだろうかと思っていた矢先、AクラスがFクラスを撃破したという報告も入ってきた。

現在宣戦布告が可能なのはAクラスと一応僕たちFMクラスのみ。

ビクビクしていた僕たちに、ついにその時がやってきた。

バンッ！

大きく開かれたドア。

立っていたのは愛紗と鈴々、そして流琉。

「我々AクラスはFMクラスに試験召喚戦争を申し込みますっ！」

「覚悟するのだっ！」

「負けませんからね！」

バタンっ！

嵐のように訪れていなくなり、僕らに沈黙が訪れる。

や、ヤバイ………！

あの目は本気だった……!?

「お、おい明久、当麻……」

「わ、分かってるよ……」

「これはいいよ……」

「「負けられない……!」」

これは人生で最初の生死をかけた闘いなのだ、僕たちは身を持って味わったのであった。

☆☆☆☆

「いいかつ！ 敵は三人だつ！

慌てずに一人ずつ見つけ出して囲んで倒せ！」

宣戦布告から1時間後。

いよいよ開戦した試召戦争。

とりあえず僕たちは時間稼ぎと戦況把握を兼ねてバラバラに逃走することにした。

どうせ真つ向から勝負しても勝てない。

ならば時間を掛けて戦おう、ということだ。

だけと思つた以上に戦況は厳しく、フィールドが展開されている場所にいるＡクラス
の生徒の点数は僕の何倍も高かった。

まあ自分で言うのもなんだが、僕は召喚獣の扱いに長けている方なので一人ぐらいは
相手出来そうだけど、どこも複数名で行動しているので見つかると思死は必須だ。

「……からどうしよ……。当麻や一刀とは連絡取れないしなあ……」

携帯の使用が厳禁されている文月学園で戦争中の使用は最悪の場合退学ということ
も考えられる。

流石に一発レッドの行為をするわけにはいかない為、どうしようかと考えていたその
時――

「おにいーちゃん♪」

耳元で囁かれた甘ったるい声。

聞き覚えはないが、何故か寒気を感じた僕は、ゾクゾクつと身体を震わせた。

バツと後ろを振り向くと、そこに立っていたのは、緑髪のボーイッシュな女の子。

見覚えもなく、名前も分からない子だ。

「はろー♪ ボクの名前は工藤愛子って言うんだ。Aクラスに所属してま〜す♪」
突然の自己紹介。

まさかのボクっ子に驚きを隠せないが、そのノリよさに流されそうになる。

「ど、どうも…FMクラスの吉井明久です……。……………つて！ Aクラス!？」

僕は更に彼女から距離を取り、壁に背を付ける。

まさかの敵クラスだと!？」

たった今命を狙われているというクラスの人に会ってしまった……。!

いや、待てよ……?」

見た感じこの子は一人なんだし、もしかすると何とかなるか……。?

「あ、心配しなくてもいいよ? ボクは吉井君を攻撃するつもりはないから♪」

「ということはこのまま僕を連れていって直接死刑を執行するつもり!？」

「あははっ! 鈴々が言ってた通り吉井君って面白いね♪ 普通は最初にそんなこと思わないよっ。」

「で、では僕をどうするつもりで……。?」

「どうもするつもりはないよ。ただ、皆が躍起になってAクラスに入れようとする人ってどんな人なのかなって思ったから一度会ってみよう♪」

「じゃあ見逃してくれるって……？ それって助けてもらう僕が言うことじゃないけど後で怒られない……？」

「大丈夫だよ。寧ろボクが吉井君を倒すのは他の人にとって不都合だし」

「へ？ どういうこと？」

「ん、あまり敵に教えたくないんだけど、まあいつか。端的に言うとな吉井君達を誰が倒したかによつて君たちの内誰をAクラスに入れるのかを決めるつもりなんだ」

「………？」

「ありや、理解出来なかつたかな？ 要は吉井君をAクラスに入りたい人達がF M クラスの内2人を倒すことでボク達が勝つたときに吉井君をAクラスに入れるってことだよ」

「なんだって!？」

そんな勝負が裏で行われていたとは……!!

「だから皆にとつては獲物である吉井君をボクが倒すのは不都合ってわけ」

「ん？ つまり工藤さんは僕らがAクラスに入ることにはたいした興味がないってこと？」

「そういうことになるのかな」

「つてことは工藤さんは僕ら三人に恨みがないってことだね」

最後の秘策

カラン

「皆!! 上条君を見つけたわよ!!」

「しまった! もう見つかった!」

私こと上条当麻は不幸である。

Aクラスの面々にバレないように隠密に行動を開始した矢先、何故か廊下に落ちていた缶を蹴って居場所がバレてしまったのだ。

くそっ。

一刀と明久のやつ、やけに別々に行動することを押してやがったがこうなることを予見してたな!?

「アイツがいるのね! 皆退いて!」

数人のAクラスのやつらの中から一人、威勢のいい女が出てくる。

そいつは俺のよく知っているやつで、俺の知っている中で最も俺を殺そうとしているであろうやつだった。

「覚悟しなさい! 逃がさないわよ!」

「くっ……!!　ビリビリがいるのか!」

「ビリビリ言うなっ!　あたしは御坂美琴!　いい加減覚えなさい!」

「怒るなよビリビリ。この間のことは謝るからさ」

「だからビリビリ言うなあああー!」

御坂の叫びと共に御坂の召喚獣から電気が放電され、俺は召喚獣を下げ、距離をとる。

相変わらず沸点低いな。

「大体謝ったところで許すわけないでしょうが!」

「何でだよ。お前が好きかどうか聞いてきたから答えたんじゃないか」

「アンタの認識変えてあげるんだから……!　貧乳には貧乳のよさが……って何言わせんのよー!」

「知らねえよ!!　お前が勝手に言っただけだろ!!　つうか俺にそう認識させてどうするつもりなんだ?」

「そ、それはその……アンタに……」

突然モジモジし始めて顔をほんのり朱に染める御坂。

後の方がゴニョゴニョと口籠って聞こえないが大したことではないだろう。

「まあそんなことどうでもいいが、どうしたら許してくれるんだ?」

「そうね……。じゃ、じゃあ今度アタシの買い物に付き合いなさいよ」

「買い物？ 別にいいが……」

「だ、だったら特別に許してあげる」

「そうか。それじゃあ俺はこの辺で」

「あ、うん。じゃあ……。ってそういうわけにはいかないわ！」

ちっ！

今自然な流れで抜けられると思ったのに……！

やっぱり逃げるのは難しいのか……？

「いいだろ!? 見逃してくれよ！」

「そういうわけにはいかないの！ 絶対にアンタをAクラスに入れてやるんだから！」

「それは何故でしょうか!? そんなに俺を殺したいのか!? それともお前はDSか!?」

「へえく……。アンタは余程あたしを怒らせたいうね……。……！」

「なぜ!? 今俺怒らせること言いましたか!?」

「ウルサイわね！ もうこの際ゴチャゴチャ言わずあたしに倒されなさい！」

そう言うが早いのが御坂の召喚獣がコインを真上に弾く。

こ、これはヤバイ！

降りてきたコインを指でこちらに向けて弾いた。

確かローなんとか力でコインを発射してどうかーとかかく、この御坂がよく使う強力な攻撃である。

って呑気に説明してる場合じゃない！

俺は召喚獣の右手を咄嗟に前にだし、コインを受け止める。

キューーン！

コインが手に当たった瞬間、電気を纏ったコインが消える。

これは俺の右手に宿る能力『幻想殺し』。

ビリビリの超電磁砲も大概だが、俺のこの能力も割りとチートだったりする。

ただし俺の場合召喚獣だけでなく自分にも宿っていて、この能力があるせいで自分の幸福ですら打ち消されているとか。

不幸だ……。

「相変わらず反則のような能力持つてるわね……！」

「つたく……いきなり打つなよ……」

結構ギリギリで危なかった。

とはいえ、状況が変わったわけではない。

早くこの場を切り抜ける術を見つけないと……。

「いたか当麻！ ちよいと協力してくれ！」

「今こそ皆で頑張ろうよ！」

いかにビリビリを怒らせず、かつ俺に被害がないようにこの場を逃れるか考えているところで聞こえたのは一刀と明久の声。

「一刀！ 明久！ 今俺もちょうど困ってー」

一緒に強力しようぜ！ と言おうと思つてたのに。

なのにーあいつらが青龍刀やら蛇矛やらを振り回してるAクラスのやつらを後ろに連れてきてるからー

「こつちに来るな一刀！ 明久！ 俺を巻き込むんじゃない！」

ー協力したくなくなつたじゃないか。

「うっせえ！ さつき皆で協力してくれるつて言つたよな！」

「そうだよ！ 皆で不幸を分かち合おう！」

「不幸だ！ 何で上条さんばかりこんな目に遭わなくちやいけないんだ！」

「そんなもんお前の右手のせいに決まつてるだろうが！ 今更そんなこと言うな！」

前方にはビリビリ。

後ろからは愛紗達。

まさに前門の虎、後門の狼とも言うべきであろうか。

これで完全に逃げ道を失つてしまった。

「今更どうこう言っても仕方ないだろうが。ここは力を合わせようぜ」

「分かった。頑張ろう」

「そうだね。とりあえず勝たないといけないし」

「よし、だったらまずは愛紗達から倒すぞ。御坂の攻撃は当麻で対応できる。やっかいなやつから倒すのが妥当だ」

「了解!!」

一刀の作戦に、俺と明久はグツと親指を立ててサムアップ。

「ご主人様!! やっかいとはどういう意味ですか!？」

「酷いよご主人様!!」

後ろから聞こえる一刀への避難。

へえく。ご主人様……か。

「一刀、いいご身分じゃないか。幸せ者だな」

「ご主人様だなんて羨ましい限りだよ。だからさ一刀ー」

「さっさと向こうに逝ってこいや」

先ほどのサムアップをそのまま下に向け言い放つ。

この野郎。俺たちは生死を賭けてるっていうのに自分はモテモテかよ。

「違う! 誤解だ! あれは愛紗達が勝手に言っているだけで俺が言わせているんじゃない」

ない！ だからその俺に向けた手をやめろ！」

む、この期に及んでまだ言い訳するのか。

もういい。こうなれば明久とだけでも同志を組んで闘うしかー

「お兄ちゃんもいい加減覚悟するのだっ！」

「お兄ちゃん、ね。明久、お前そんな趣味があつたのか。可愛い子にお兄ちゃんなんて羨ましいな。死ぬ」

「待って!? そんな自然に死ぬって言わないでよ!?」

くそおおおー!!

俺には何も味方してくれないっていうのかよ!?

2人とも羨ましいすぎるっての!!

「へえ……。あんたって鈴々みたいな子が可愛いんだ……。だつたらさつきと死になさ

いこのロリコン野郎っ!!」

「ほら見ろ!! 俺にはこのビリビリの攻撃しかないんだぞ?」

「いや、今のは全面的に当麻が悪いから」

「どこがですか!?!」

今の会話の中に御坂をおこらせるような発言はひとつも無かつたはずだ。

なのに何で俺が悪いのだろうか。

さっぱり分からん。

「だあああー！ まあいい！ もうすぐ俺たちに勝機が見えるんだからな！」

「何か他に策があるのか一刀!？」

「おう！ たぶんもう来るはずー」

「ご、御主人様大丈夫ですか!？」

「死ね明久ーもといロリコン野郎」

「朱里!?! というか今二人とも死ねって言ったよね!？」

当たり前だ。

鈴々のみならず朱里にまで、しかも今度は御主人様だど？

どこまで明久は羨ましいんだ。

「朱里！ 代表であるあなたがどうしてここに来ているのですか!？」

「はわわ！ そ、それはご主人様が怪我をして大変だつて…」

「くっ……! 朱里らしくない……! そんな情報に騙されるなんて……!」

「へっ! さつきムツツリーニにたまたま会ったときに俺の秘蔵の聖書3冊でガセを流してくれて頼んだんだ。あいつの流す情報はヤケにリアルっぽくなるからな」

「流石だよ一刀! エロ本3冊で手を打つなんて!」

「そうだよな! 自分のエロ本の中から3冊犠牲にするなんてよ!」

「へえ……？　ご主人様、そういう春書を処分するのはいいことだけど、裏を返すと3冊も持ってたってことだよね……？」

「それも当麻殿の発言から他にもまだ持っているようですね……？」

「明久、当麻！　お前ら絶対わざとだろ!!　俺がせっかくオブラートに包んで聖書って言ったのに！　しかも他に持つてることまでバラさなくていいだろ!!　何か恨みがあるのかよ!？」

いや、あるだろ。

ご主人様って呼ばれてるとかご主人様って呼ばれてるとかご主人様って呼ばれてるとか。とか。

「一刀の犠牲は気にするな明久！　大将はそこにいる！　後は倒すだけだ!！」

「了解!！」

「気にしろよ!!　つか俺の犠牲って完全に無駄じゃん!！」

さらばだ一刀。

安らかに眠れよ。